

本見学旅行は、この二年間にわたる私と日本との関わりを一つの線として結び直す機会となった。

目的地へ向かう電車内で、張先生が ChatGPT を基盤として作成された「AI 二宮尊徳」問答プログラムを取り出された。その際、昨年の紹興での研学活動において、学生が発表で言及していた「AI 魯迅」という構想を思い起こした。ChatGPT の登場以降、大規模言語モデル (LLM) の人文社会科学分野への応用は、学界においても次第に注目を集めている。異言語間翻訳から知識の平易化に至るまで、AI が情報伝達の領域において有する潜在力は一層納得できる。

災害は、EAA 見学活動における一つの小さな主題でもあったと思います。仙台では東日本大震災メモリアルを訪れ、地震と津波の破壊力を直視する経験を得た。二宮尊徳資料館では、相馬市の団体が東日本大震災後の復興支援に対する謝意として小田原市へ寄贈した『報徳記』の史料を目にした。この行為は、報徳思想の核心と響き合うものであると感じられた。また資料館では、解説員の方が富士山の百年単位の地質活動から話を起こし、二宮金次郎が生きた時代へと接続された。このように地質学的時間を座標軸とする語りは、いわゆる「人新世」的視座を想起させるが、むしろ人間の時間が自然の時間に従属する構図であった点が印象的である。1703 年の富士山噴火は、その後二世紀以上にわたる自然災害をもたらしたとされる。もし村落の結束や相互扶助、領主による負担軽減がなかったならば、飢饉の影響はさらに深刻なものとなっていた可能性がある。この「山川昇域、風月同天」の精神に触れるたびに、連帯の持つ現実的な力を実感する。また資料館では、2002 年に北京大学において二宮尊徳思想を主題とするシンポジウムが開催されていたことを知った。かつて相互扶助の象徴であった二宮金次郎が、新世紀においてもなお対話の媒介となっている事実は示唆的である。

二宮金次郎の近代日本における表象も、検討に値する論点である。張先生から最初に提示された問いは、なぜ金次郎が神格化されたのかというものであったが、私は、マックス・ヴェーバーの問題設定を思いました。すなわち、「なぜ中国やインドにおいては、西洋に特有の合理化の道が成立しなかったのか」という問いである。ヴェーバーは『儒教と道教』において、中国宗教の分析を通じ、儒教および道教の倫理が近代的資本主義精神の生成を促進しなかったと論じた。一方で、二宮尊徳の思想は戦後日本の企業文化において一定の役割を果たしてきたように見える。見学では、ヴェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』に言及しつつ、勤労の徳目における共通性が指摘されていた。しかし、プロテスタント倫理における節制や禁欲は、節約された資本を再び生産活動へ投下し、神の栄光を証しするという内的論理に基づいている。それは私有財産制を前提とする経済発展と親和的であり、蓄積された富は原則として個人に帰属する。他方、尊徳の報徳思想は、共同体の持続可能性を視野に入れて構想されたものである。「勤労」「分度」「推譲」といった原理は、戦後日本の中小企業倫理教育や地方銀行、農業協同組合などにおいて再解釈され、企業道德の資源として活用されてきたが、それは制度的起源というよりも倫理的補完としての性格が強い。さらに、国家的語りの中で尊徳思想は選択的に取り入れられ、国家主義的倫理や家族主義的企業構造と結びつき、「企業共同体」という理念を支える言説として機能してきた。この差異は、日本と西欧の社会経済的・文化的背景の相違に由来する精神的要請の違いとも解釈し得る。表面的にはいずれも勤労を奨励しているが、その内在的構造と目的は大きく異なっている。報徳思想が提供するものは、合理化された「資本主義精神」というよりも、組織内部の秩序や忠誠を維持するための道徳的言語であると考えられる。

この二年間は、中日関係が大きく変動した時期でもあった。「東アジア研究」プログ

ラムへの参加を通じ、対立と交流の具合をより具体的に体感する機会を得た。東京大学および北京大学の関係機関がこの学習機会を提供してくださったこと、またご指導くださった先生方と共に学んだ同級生の支援に対し、ここに謝意を表したい。





